

現況分析における顕著な変化  
についての説明書

教育

平成22年6月

奈良教育大学

## 目 次

1. 教育学部	1
---------	---

## 現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 国立大学法人 奈良教育大学

学部・研究科等名 教育学部

## 1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 学業の成果

## 2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

## ○顕著な変化のあった観点名

観点4-2 学業の成果に関する学生の評価

次の2点において、顕著な変化があったと判断できる。

【制度の創設】学業の成果に関する学生の自己評価を把握すべく、意見聴取制度を平成20年度より開始した。( )「卒業時アンケート」では、学生の獲得目標とする資質・能力及び養成しようとする人材像に対応した項目によって学生の達成度を自己評価させた。( )「授業評価アンケート」では、授業科目の達成度についての設問を追加した。

【制度の遂行】上記①における意見聴取(学生の自己評価)の結果、( )と( )において、平成20年度、平成21年度ともに学業の成果を示す高い数値となった。

①②に係る経緯と根拠は、以下のとおりである。

( )本学は、学業の成果に係る学生の自己評価の把握を目的として、平成20年度より、卒業予定者を対象とした意見聴取制度、すなわち「卒業時まで獲得すべき資質能力(達成目標)への自己評価」アンケート(本学での呼称「卒業時アンケート」)を開始し、学業に関わる学生の自己評価をより明確化することに努めた。

アンケートの質問項目は、平成19年度から本学が構築してきたカリキュラム・フレームワーク【7つの目標資質能力基準】(※1)に対応した9項目(※2)からなっている。各項目で、学生は5段階で自己評価を行う。

アンケートが依拠する「カリキュラム・フレームワーク」は、本学独自の取組みであり、大学評価・学位授与機構から次のコメントを頂戴した。(平成21年度実施の大学機関別認証評価)

「教員と学生との間で、個々の授業の目的やカリキュラム全体における位置付けについて共通に理解できると同時に、教育の成果の目標達成状況を、教員と学生両方の側からの検証・評価を可能としている。」「バランスのとれた、全体像の見えるカリキュラムを編成し、学生が獲得すべき資質能力目標を明示しているのは、きわめて優れた取組である。」

( )また、平成20年度後期より、授業評価アンケートに“この授業を受講して、あなた自身は、シラバスに記載されている授業の目的をどの程度達成できたと思いますか。”という設問を追加し、各授業での達成度を5段階で自己評価させることとした。

①に基づき、学業の成果に関する学生の自己評価を行った結果は以下のとおりである。

( )「卒業時アンケート」では、達成度3以上(5、4、3)の肯定的な回答が、下表右端の総計で、平成20年度においては**89.9% (4以上は50.3%)**、平成21年度では**91.3% (4以上は47.0%)**といずれも高い数値となっている。(有効回答率:平成20年度72.3%、平成21年度79.0%)

( )「授業評価アンケート」では、達成度3以上(5、4、3)の肯定的な回答が、総計で、平成20年度後期においては**93.8% (4以上は57.8%)**、平成21年度前期で**93.2% (4以上は52.9%)**、後期では**94.9% (4以上は57.9%)**といずれも高い数値となっている。

※1 本学「学部・研究科等の現況調査表(教育)」(平成20年6月提出)1-33頁 資料1-6-1-a 参照

※2 目標資質能力基準「4 授業力」は、「4.1 学習設計」「4.2 学習指導」「4.3 学習評価」という3つの小項目に分かれているため、合計で9項目となる

## 平成20年度より開始した卒業時アンケート(達成目標への自己評価)の集計結果

達成度「5」「4」「3」との回答の割合(%)

右欄項目の詳細は※1	1. 学校教育の課題把握	2. 教科・領域に関する基礎的知識と教育実践への具体化	3. 情報活用能力	4. 1. 授業力・学習設計	4. 2. 授業力・学習指導	4. 3. 授業力・学習評価	5. 児童・生徒理解と教育実践への具体化	6. 学校と地域社会との連携	7. 職能成長	総計
平成20年度	90.6%	89.5%	90.6%	92.1%	90.1%	83.2%	89.5%	88.0%	95.3%	89.9%
平成21年度	92.2%	93.1%	94.1%	93.1%	90.7%	87.7%	89.7%	87.7%	93.1%	91.3%